特集　研究事例紹介

「シンボリック相互作用論ノート」の web 公開について

桑原　司

法文学部　経済情報学科

kuwabara@leh.kagoshima-u.ac.jp

私は大学院時代より社会学理論、就中「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism) という理論を専門としている。私がはじめてこの理論に接したのは、熊本大学文学部地域科学科に入学後（昭和６３年、４月）、その３年目の終わりに、所属コースを「民俗学コース」から「社会学コース」へとコース変更し、そこで医療社会学を勉強しはじめたときであった。ひとくちに医療社会学とは言っても、そのフィールドは多岐にわたるが、私が専攻したのは、終末期病棟における医療スタッフらと患者とのコミュニケーション形式の研究であった。その研究を行うに際して私は、グレイザー(Glaser, B.G.)とストラウス(Strauss, A.L.)という２人の社会学者の理論に取り組んだが、後にこの２人の社会学者のうち、後者の社会学者が「シンボリック相互作用論」と呼ばれる理論の一翼をなす人物であること知り、大学卒業後に（熊本大学大学院文学研究科「大学院聴講生」在学時、平成５年度）、医療社会学から離れこの理論それ自体に興味を抱くようになり、シンボリック相互作用論の理論それ自体を専門とするようになった。私は平成１３年度より、この関連の情報を私のホームページ

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/index.html

の「ページ」として公開している。具体的にあげるならば、それらは次のようになる。

（１）「シンボリック相互作用論に関する恣意的文献リスト」
　　http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/SI.htm。

（２）「卒業論文要旨」
　　http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/other-paperR.htm。

（３）「修士論文」
　　http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/master-index.htm。

（４）「修士論文要旨」
　　http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/summary02.htm。

（５）「博士論文」
　　http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor.htm。

（６）「博士論文要旨」

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/summary.htm。

（７）「初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論」

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/Blumer-as-CS.htm。

（８）「自我の社会性」

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/kuwabara-ch2.htm。

（９）「相互行為と合意」

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/kuwabara-ch8.htm。

（１）「シンボリック相互作用論に関する恣意的文献リスト」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/SI.htm について。

シンボリック相互作用論とは、１９６０年代初頭にアメリカの社会学者Ｈ・Ｇ・ブルーマーが創始した、社会学的・社会心理学的パースペクティブの１つである。それは、人間間の社会的相互作用､就中､シンボリックな相互作用(symbolic interaction)を主たる研究対象とし、そうした現象を「行為者の観点」から明らかにしようとするものである。シンボリック相互作用論は通常、その歴史的由来をＧ・Ｈ・ミード(1863-1931)の業績に遡ることが出来る。ミードは生前数多くの論文を執筆したが、ミードのシンボリック相互作用論に対する影響の大部分は、まず第１に、彼の講義を聴講していた学生らの手による、その講義録やメモの出版を通じて、第２に、当時ミードに学んだ学生の一人であったＨ・Ｇ・ブルーマーによるミード解釈を通じて及ぼされたと言われている。ブルーマーは、主として１９５０年代と６０年代に数多くの論文を執筆し、シンボリック相互作用論の体系化を図った人物である。当初「シンボリック相互作用論」と言えば、それはイコール「ブルーマー」という時代がしばらくの間続いた。とはいえその後、７０年代、８０年代になると、シンボリック相互作用論を担う新しいリーダーとして、Ｎ・デンジン、Ａ・Ｌ・ストラウス、Ｓ・ストライカー、Ｇ・ファインなどが登場し、この理論の新たな方向性が模索されるとともに、ブルーマーの理論化に対する種々の批判が展開されるに至った。８０年代にはさらに、Ｅ・ゴフマンが登場し、「ドラマツルギー」(dramaturgy)と呼ばれる手法が提示された。このページでは、そうしたシンボリック相互作用論に関する国内外の研究論文および諸著作を可能な限り収録するようにつとめた。文献を列挙するにあたり凡例として、

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor.htm

を原則として踏襲した。現在、このページは次の各サイトにリンクされている。

１）「社会科学基礎論研究会」http://www.wakhok.ac.jp/~harie/kisokenlist.html

・・(「より基柢への問い」と「充分な討論の確保」を基本理念とした、社会学・社会科学基礎理論研究会。世話人は、稚内北里学園大学、張江洋直氏)。

２）「日曜社会学」http://thought.ne.jp/luhmann/list/weblist03.html

・・(ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンに関するブックガイド、語録、翻訳等。酒井泰斗氏作成)。

３）「社会学電子文献目録（大阪大学）」http://risya3.hus.osaka-u.ac.jp/Links/bib.html

・・(インターネット上で読める社会学文献のリンク集)。

４）「ミードに関する二次文献リスト（国内）」http://isweb43.infoseek.co.jp/school/taka-y02/

・・(作新学院大学、山尾貴則氏作成)。

５）「人事組織の研究ページ」http://www.geocities.co.jp/WallStreet/4716/index.html

・・(「シンボリック相互作用論のポイント」http://www.geocities.co.jp/WallStreet/4716/symblicinteraction.htm)。

６）「脇田健一さんのホームページ」http://www.anna.iwate-pu.ac.jp/~wakita/index.htm

・・(「リンク集」http://www.anna.iwate-pu.ac.jp/~wakita/link-2.htm)。

（２）「卒業論文要旨（熊本大学文学部・地域科学科・社会学コース）」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/other-paperR.htm について。

・・・・日本の脳死問題・臓器移植問題の発生メカニズムを、Ｗ・Ｆ・オグバーンの「文化遅滞」(cultural lag)理論を使って解明しようとした論文。オグバーンは、社会進化を問題とする場合に、進化しているのは社会であるというよりは文化であると主張し、文化を物質的文化、適応的文化、精神的文化の三つに分類したが（なお、後２者の「文化」を合わせて「非物質的文化」という）、彼によれば、この三つの文化の変化の速度は同じではなく、それぞれ変動には“ずれ”(lag)が生じるという。すなわち、物質的文化は変動の速度が速いが、適応的文化はこれと同時に変化するわけではなく少し遅れを見せるのであり、精神的文化の変動は極めてゆっくりとしている。このような現象をオグバーンは「文化遅滞」と名づけたのであり、近代社会は文化変動の激しい社会であり、その現象が特に著しく社会問題化しているという。本論（熊本大学、卒業論文）の考察の結果、日本の脳死問題・臓器移植問題もまた、こうした文化遅滞（物質的文化＝「先端医療技術、就中、人工呼吸器・血管縫合技術・免疫抑制剤」、適応的文化＝「法律、就中、臓器移植法 etc」、精神的文化＝「日本人の死生観・遺体観」）の結果として生じたものであることが明らかとなった（鹿児島大学経済学会、『経済学論集』５４、鹿児島大学経済学会、２００１年、８０－８１頁)。・・・・

（３）「修士論文」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/master-index.htm について。

このページでは、筆者が東北大学大学院文学研究科に提出した修士論文「Ｈ.Ｇ.ブルーマーのシンボリック相互作用論における『行為者と社会との関係』再考」の全文を公開してい

る。

（４）「修士論文要旨」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/summary02.htm について－－東北大学文学部社会学研究室、『ソキエタス』第１５号、東北大学文学部社会学研究室、１９９６年、より引用－－。

・・・・ブルーマーのシンボリック相互作用論が提起する「人間と社会との関係」ないしは「行為者と社会との関係」とは、パーソンズを中心とする構造機能主義社会学が有する「人間と社会との関係」に対する徹底したアンチテーゼであった。構造機能主義社会学が有する「人間と社会との関係」とは、簡潔に述べれば、社会が一方的に人間を形成するというものであった。そのような「人間と社会との関係」、換言すれば、社会による一方的な人間形成の論理に対して、ブルーマーのシンボリック相互作用論が提起したのは、それに対するアンチテーゼとしての人間による社会形成の論理であった。

本稿は、このブルーマーのシンボリック相互作用論における「人間と社会との関係」ないしは「行為者と社会との関係」を問い直すことを目的にしている。具体的には、本稿は、ブルーマーのシンボリック相互作用論の柱石を占めている「自己相互作用」(self interaction)概念との確固たる結びつきのもとに、そのシンボリック相互作用論の「理論」において、社会が「動的・過程的」である所以を解きあかそうとしている。

本稿が明らかにしたところによれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」においては、まず「行為者と世界との関係」は、その行為者の「自己相互作用」を通じて設定されるものと考えられていた。しかし、そのような「自己相互作用」は、フリーハンドになされているものではなく、その行為者が当該の「世界」(world)ないしはその世界を構成する「対象」(object)（具体的には他者ないしは他者達）より前もって獲得した、二つの「図式」に沿ってなされるものであると考えられていた。

この二つの「図式」に沿って、行為者は世界を定義し、その世界との間に、ある一定の関係を取り結ぶ。しかしこの「世界」は、行為者による一方的な定義を許すものではなく、そのような定義に対して「抵抗」(resist)ないしは「トークバック」(talk back)することができる「現実の世界」(world of reality)でもあった。さらに行為者は、この世界からの「抵抗」ないしは「トークバック」を手がかりとして、自らの定義の妥当性の如何を知ることができ、必要とあらば、自らの定義を修正し、その結果として、その世界との間に取り結んでいる既存の関係性を再構成するのであった。この意味で、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「行為者と世界との関係」は、行為者による一方的な定義活動によって定められるものではなく、行為者による定義と、その定義に対する世界からの「トークバック」との相互作用ないしは相互影響の中で構成・再構成されるものとして捉えられていたことになる。

上記の知見を以て、ブルーマーの「ジョイント・アクション」(joint action)論を再考し、その結果として、社会が「動的・過程的」である所以を、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに説明することにしよう。

我々の考察では、社会的相互作用に参与する行為者と他者との双方が「自己相互作用」の特殊形態としての「考慮の考慮」(taking account of taking account)を行い、それに基づいて互いに相手に対して行為し合うとき、そこに「ジョイント・アクション」＝「社会」が形成されると、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては見なされていた。ここで「考慮の考慮」とは、他者が考慮に入れていることを、行為者自身が考慮に入れることによって、また、それを他者の側も行うことによって、その行為者と他者とが「単に自分が相手のことを考慮に入れるだけではなくして、逆に、自分のことを考慮に入れている相手として、その相手のことを考慮に入れる」ことを意味していた。さらにその結果として、相手が自分に関して想定していることを、自分自らが想定することになるとするものであった。これを双方が適切に行った場合、「ジョイント・アクション」はスムーズに形成されるとするのが、ブルーマーの議論であった。

ここで適切な「考慮の考慮」が自他ともにおこなわれている場合、その行為者とその他者との間には「共通の定義」(common definition)が生じる。さらに、この「共通の定義」によって、「ジョイント・アクション」の安定した形態が繰り返し生起することが可能になる。またこの「共通の定義」は、社会的相互作用への参与者達が、同一の解釈図式を、すなわち、同形式の「考慮の考慮」をおこない続けることによってのみ維持されうるものとして、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては捉えられていた。「ジョイント・アクション」＝「社会」が「動的・過程的」であるためには、この「ジョイント・アクション」がその形態を変容させるメカニズムが説明されえなければならない。換言すれば、社会的相互作用への参与者達が、自らの「解釈図式」ないしは「考慮の考慮」の仕方を変容させるメカニズムが説明されなければならない。

「ジョイント・アクション」を形成している行為者と他者というダイアディックモデルにおいては、行為者にとっては他者が、そして他者にとっては行為者が「対象」であり、互いが相手に関して「考慮の考慮」をおこなっている。さらに、互いに相手が「対象」であると言うことは、互いにとって相手は解釈され、定義される存在であると同時に、そのような解釈や定義に対して「抵抗」ないしは「トークバック」し得る「現実の世界」でもあると言うことになる。その結果、仮に他者が行為の再設定をおこなえば、そのことは、行為者の側から見た場合、その行為者にとっての「トークバック」を意味することになる。さらにこの「トークバック」を契機として、その行為者が行為の再設定をおこなえば、今度は、他者の側から見た場合、それがその他者にとっての「トークバック」を意味することになる。すなわち、

どちらか一方に対して「トークバック」が向けられるときにはいつでも、それを向けられた側は、自己の行為の再設定をおこなうことになり、そのことが他方の行為の再設定を促すことになるのである。双方の行為の再設定がおこなわれれば、両者の間に成立している「ジョイント・アクション」の形態も変化することになる。しかも、このような変化の可能性は、常に存在している事を我々は明らかにした。というのも、この行為者と他者との関係においては、互いがいくら正確に相手を把握しようとしても、互いにとって相手は、常に「人間によって全く知覚されないかもしれないし、知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない」「現実の世界」だからである。

以上のようにして、「ジョイント・アクション」＝「社会」は、人間の「自己相互作用」の形式の変化に伴って、その形態を変容させるのである。しかし、このようなブルーマーの定式には、かねてより、それが「ミクロ主義」的であるとの批判が寄せられてきた。すなわち、「社会構造論的視点の欠落」ないしは「集合的レベルの事象を説明することの困難さ」が指摘されてきたのである。このような批判に対して、ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論枠組みでも、マクロな分析が可能であるとの見解を堅持する種々の論者は、次のように反論していた。すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「行為者」というタームは、「活動単位」(acting unit)とも表現されており、この表現が意味することは、「行為者」（「活動単位」）には、単に人間個人のみならず、「集団」も含まれているということである、と。すなわち、ミクロな領域を分析する際には、「社会」すなわち「ジョイント・アクション」を、それが「個人」と「個人」から形成されるものと捉え、マクロな領域を分析する際には、それが「集団」と「集団」とから形成されるもと〔ママ〕捉えるというのである。しかし、このようなブルーマー論には、我々が考える限り、二つの欠点がある。そのうちの一つは、このようなブルーマー論では、マクロ分析をおこなう際には、ブルーマーのシンボリック相互作用論の柱石として位置づけられている「自己相互作用」が、分析の後景に退いてしまうということである。そしてもう一つは、このようなブルーマー論を想定すれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の方法論的な鉄則である「行為者の見地」(position of the actor)からのアプローチが、実行不可能なものとなってしまうということである。

社会理論の根底に「自己相互作用」概念を据え、かつ、方法論的鉄則として「行為者の見地」からのアプローチを遵守した上で、如何にしてマクロ分析をおこなうのか。これがブルーマーのシンボリック相互作用論に残された課題の最たるものである・・・・(７２－７５頁)。

（５）「博士論文」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor.htm について。

このページの内容は、筆者が、１９９９年３月に、東北大学大学院文学研究科博士後期課程を単位取得退学した後に、東北大学大学院文学研究科に提出した博士論文『社会過程の社

会学』(http://www.sal.tohoku.ac.jp/guide/grad2000/pages/p16hakushigo.html)の全文を公開したものである。なお、その全文については次の文献としても公刊されている。桑原　司、『社会過程の社会学――ハーバート･ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考――』、関西学院大学出版会 BookPark(http://www.ipsu.bookpark.ne.jp/ipsu/)、２０００年。現在、このページは次の各サイトにリンクされている。
「日曜社会学」＝http://thought.ne.jp/luhmann/list/weblist02.html。
「社会学電子文献目録」＝http://risya3.hus.osaka-u.ac.jp/Papers/。

（６）「博士論文要旨」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/summary.htm について。
　このページの内容は、『東北大学第４４号◇博士学位論文◇内容の要旨および審査結果の要旨◇文学◇第１１集（平成１１年度授与）◇東北大学◇平成１２年度』という冊子の２４８－２５９頁に掲載されている「論文内容の要旨」および「論文審査結果の要旨」のうち、前者の原稿（「論文内容の要旨」）に若干の加筆補正を施したものである。なお、本ページの内容は、次の文献としても公開されている。桑原　司、「シンボリック相互作用論序説（３）――東北大学審査学位論文（博士）の要旨――」（鹿児島大学経済学会、『経済学論集』５４、鹿児島大学経済学会、２００１年）。

（７）「初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/Blumer-as-CS.htm について。
　法文学部経済情報学科では、紀要として『経済学論集』（鹿児島大学経済学会）を公刊するほか、Discussion Papers In Economics and Sociology という研究成果の公開制度を設けている。このページの内容は、その制度を通じて公開した次の拙稿を転載したものである。桑原　司、「初期シカゴ学派社会学とブルーマーのシンボリック相互作用論」(The Economic Society of Kagoshima University, (ed.), Discussion Papers In Economics and Sociology : No.0203, The Economic Society of Kagoshima University, 2002).

（８）（９）「自我の社会性」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/kuwabara-ch2.htm および「相互行為と合意」http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/kuwabara-ch8.htm について。
　ともに、筆者が教科書に執筆した原稿（前者は、船津　衛・安藤清志編著、『自我・自己の社会心理学』、北樹出版、２００２年に所収の原稿である。後者は、伊藤　勇・徳川直人編著、『相互行為の社会心理学』、北樹出版、２００２年に所収の原稿である）を、加筆補正の上、ｗｅｂ上に転載したものである。